

《生きている信仰、純粋な心で願えば必ず叶(かな)えられます》

今日は、ピアンネ司祭について少し話し合いたいと思います。

今日の「毎日のミサ」の本を見ますと、司祭ピアンネについて少し紹介されています。

彼は、1786年、フランスのリヨンの辺りで生まれます。そして、熱心なカトリックの信仰を持っていたので、神学校に入りますが、神学校に入っても、進級できるくらいの能力がありませんでした。落第が続き、「この神学生は、司祭にはなれない」という神学校の指導司祭達の意見で退学をさせられます。しかし、神学校を退学させられたピアンネを小教区の司祭が見ると、信仰が深く、全ての振る舞いや心持ちがあまりにも美しかったので、司教さまに願います。その結果、司教さまの名によって特別な教育を受けることになります。



司祭になるためには、最低このくらいは必要、という基礎的知識というものがあります。即ち、ローマの教会によって定められた、「少なくとも6年、神学校で勉強をしなければ司祭にはなれない。」というような法がありました。しかしピアンネは、その6年間の勉強も進められなくて退学させられました。そこで、特別な先生のような方がついて、ピアンネを教えました。そして、いろいろな困難を乗り越えて司祭になったわけです。

司祭になると、「毎日のミサ」にも少し紹介されていますが、ある司教区のアルス村というところへ小教区の主任司祭として派遣されます。それは山奥にある小さい村でした。信徒の数は、全部で230人くらいでした。ピアンネは、自分がなぜ司祭になったのか、そしてその目的やどのように神様に捧げなくてはならないかをよく分かっていたので、その小教区の人々の指導のために懸命に仕事をしました。

彼の説教は、とても単純でしたが、非常に人々の心を動かす神父だったそうです。信徒が230人くらいの小さな教会でしたが、それが噂になり、遠くからたくさんの人々が集まってきました。ピアンネ司祭の説教を聞くだけのために、そしてもし運よく赦しの秘跡を受けられれば死んでもよい、というような人々がだんだん増えてきました。それらの人々の噂により、更に集まる人々は増えてきました。その結果、ピアンネ司祭は、毎日17時間から18時間を赦しの部屋で過ごすようになりました。これは、本当に極端な振る舞いです。1日のうち18時間を赦しの部屋で過ごすため、司祭館も告解室も聖堂も同じ空間に作られ、自分のベッドさえ聖堂の、告解室の近くに置いたそうです。そして寝る時間とミサの時間以外は、ほとんどいつも赦しの秘跡を受けていました。

彼が亡くなったのは、1859年7月29日でした。今日より数日前ですね。その日、彼は、17時間赦しの秘跡を受けて、「これ以上は私には無理です」と言いながら、倒れます。そして見守っていた信徒の家族を祝福してから亡くなったそうです。

ピアンネ司祭が残したいろいろな言葉があります。その一つに、『私たち福音者にとって、宝物と言うのは、地上のものではありません。私はいつも、クリスチャンは天国にある宝物を受けなければならないと思っています。地上で探そうとすれば、必ず罠に陥ります。誘惑によって、地上で生きる意味を、宝物を、探そうとすれば、私たちは必ず倒れます。私たちが倒れない唯一の方法は、約束された賜物が天国にあることをいつも意識することです。』という話があります。

そして彼は、『この地上で行うべきことは二つしかありません。』と言っています。一つは、「祈り」、もう一つは「愛の実践」です。この二つは、私たちがこの地上で生きる意味と目的をはっきり表して

くれます。そして、「祈りとは何でしょうか」と聞いた人々に、このように答えました。『祈りというのは、そんなに複雑なものではありません。祈りは、結局イエス・キリストとの一致です。それ以外の何物でもありません。願うことでも、話すことでもありません。ただ一致することです。』と。そして、いろいろなことから祈ることに難しさを感じる人々に『祈りは、はちみつのようなものです。ですから私の場合は、祈れば何時間でもあつという間に過ぎてしまいます。』という話をしています。

ビアンネ神父はピオ11世によって、聖人の階位を授けられました。

このビアンネ聖人の話は、時々神学校で話題になります。勉強でものすごく疲れていると、「お前もビアンネ司祭よりは優れているから大丈夫。」などと。また、「多少学問ができて変な道を歩むより、少し足りなくてもまじめな信仰を持ってビアンネ司祭のような生き方をすることこそ、私たちが最後まで願うことだ。」といつも話していた霊性指導の司祭の言葉が今も心にあります。

そしてビアンネ司祭は、最後にこのような話をしました。『もし私たちが、生きている信仰、純粋な心で願えば必ずかなえられる。これがイエス様との約束です。』と。ですから、私たちがいつも振り返ってみなければならないことは、本当に生きている信仰、純粋な心を持っているか、ということです。では、生きている信仰とは何でしょうか。それは、「神様があなたを愛していることをあなたがいつも信じている」ということです。では、純粋な心とは何でしょうか。それは、泣くべきところで泣く、喜ぶところで喜ぶことでしょう。もし、傷が多かったら私たちはその純粋な心の働きを失ってしまいます。もとの心、すなわち神様が生まれる前から下さったその純粋な心に戻らなくてはならないと思います。笑うときに笑い、泣くときに泣けるような純粋な心を持って、本当にこれはあなたのために、その人のために祈ります、と祈る純粋な心があれば全て叶えられるという、そのビアンネ聖人の言葉を心に刻みましょう。

さあ、今日の福音(マタイ 14:22 - 36)で、ペトロが湖に落ちそうになりました。質問します。ペトロが湖に落ちそうになったのは、信仰が足りなくてそのようになったと思いますか。恐らくイエス様もペトロが湖を歩くことを失敗すると分かったと思います。しかし、イエス様はそのようになったペトロに、「信仰の薄い者よ」とおっしゃいました。そのときペトロがイエス様に対して持っていた心が、私たちより薄いものだとは思えません。人間としては、とても強い心を持っていたのでしょ。だから「この水の上を歩かせてください」というようなとんでもないことを願ったのでしょ。それなのに、イエス様が「信仰の薄い者よ」と言われたのは、私たちはいつも信仰の薄い状態であることをおっしゃっているのではないかと思います。だからこそ、神様の力が必要であること、祈りが必要であることを今日の福音を通して訓えていると思います。

ありがとうございました。